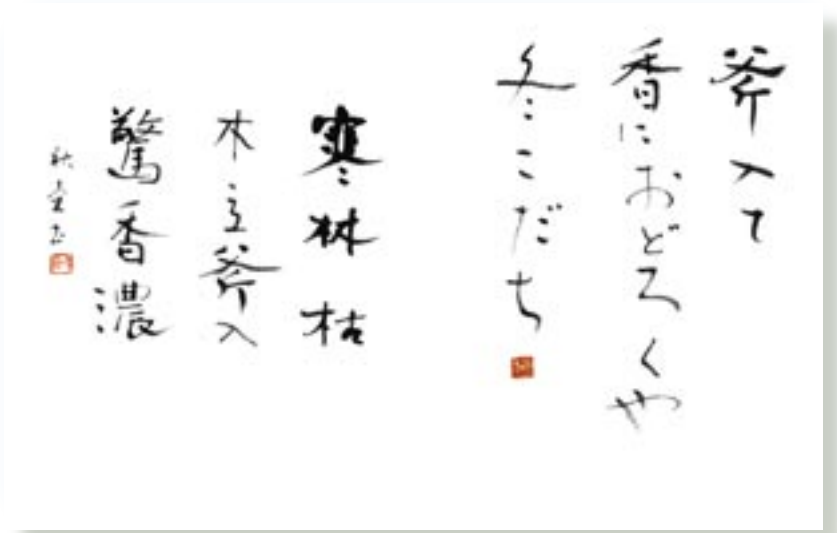
あを

PDF 制作　　俳誌の salon



武井明子 書

俳句 / 与謝蕪村

唐紙のどこかの山水横ばしる
反芻といふ小春日にたちすくむ
ゆく鳥に凍湖は全反射して應ふ
初雪や天女にすこしつちふまず
弟にアル中のをり溫め鳥
冬櫻數を違へし早團子
はや足にしてひとところ春の檻

溫め鳥

佐藤喜孝

枯ほほづき書棚の隅に挿してある
ひとわたり棚の物見て初詣
スキーのふたり網棚を長く占む
神棚にしばらく上げしお年玉
ぶだう棚はがねの絡むごと枯るる
やかましき鵯も来ずぶだう棚
ぶだう棚ちかづくほどに芽のけはひ

ぶだう棚

竹内弘子

ゆく雲や重なりあひて落椿
泣き顔で笑ふをみなや年の酒
かはるため枯葦原をぬけてゆく
賜はりし花弁餅のやはらかさ
頬杖を杖も突かずに寒の入

堀内一郎

とどめ得ぬ時除夜の鐘鳴りはじむ
初湯して看取りの日日を去年とする
大根煮る一人暮しの湯気立てて
わが声にわれのおどろく冬の居間
綿虫や切なき記憶捨つるべし
霜夜しんしん大椀に盛る薩摩汁
柊咲き奈良に細身の阿修羅像

大根煮る

田中藤穂

酒瓶に水を満たせし良夜かな
夢のつづき酒船石に温酒
ひと夜酒レントゲン写真もちかえる
濁酒酒井田柿右衛門の青
舌下錠いつものやうに日向ぼこ
岩棚をとびだす用意冬すみれ
ねまるまで絵らうそくの焔のなかに

元日や田水張る農様変る
故郷の畑にまろぶ霜柱
遠き日の大山小さし雪すくな
お年玉予想はるかや未来ッ子
厄流し仕立小舟を沖おきへ
新年に羊の親子連れだち来
厄落祝籤なるはづれなし

さけ
吉弘恭子

故郷にて
斉藤静枝

神棚に餅花踏台が無い
片方は懐手にて蕎麦すする
白壁に譫妄の見ゆ冬鴉
コラーゲンは足りてゐるはず初鏡
襖一枚むかうにありぬ修羅のこゑ
野良猫は御慶みぢかく擦り寄りぬ

真夜中に布団被りてほくそ笑む
山々も木々も雪見て化粧する
ヤケ酒に心身倒るクリスマス
七転び七回起きるスキーヤー
雪に酔いここはどこだと関越道

篠田純子

篠田大佳

初霞たなびく厳島大社
足拍子鈴の音凛と能初め
和蝋燭匂ふ神棚大旦
書棚より猫が見おろす去年今年
温め酒夫の遺愛の白磁盃
二月堂机の上の初硯
耳鳴りのふと止みにけり小夜時雨

エプロンを結ぶすべなき肩の冷え
愛しき者愛しみ抱くクリスマス
日記買ふ集ひの事をまづしるす
老どちの日日安かれと初護摩会
初釜に老どち装ふ声音まで
年賀の客遠来して遠き日を
未年メールで届く初便り

芝 尚子

初釜

芝宮須磨子

森　理和

瀧の音出会へてほつと空仰ぐ

犬のアドルフ従え釣舟草スケッチ

滝川の白に綾なす七竈

落ち口の覆い被さる滝しぶき

新蕎麦に一箸一点山葵添へ

新蕎麦や口腔で息吹き返す

あの山へ行けたらいいな赤とんぼ

吾亦紅一度に四人乗るリフト

苔桃の実を数へつつ息納め

肋木の納まる山荘月明し